太宰府の文化財 (241)

絵馬「袴垂図」一面

クス材　縦164・4㎝　横164・6㎝
江戸時代　斎藤秋圃筆　太宰府天満宮蔵

太宰府天満宮の絵馬堂に掲げられています。

画題は『今昔物語』(平安時代末)や『宇治拾遺物語』(鎌倉時代初)に載っている袴垂の話です。『今昔物語』には「藤原保昌朝臣値盗人袴垂語」と題し「天盗賊の袴垂が着る物が必要になって、どこかから盗み取ろうと夜中、都大路を歩いていると、笛を吹きながら一人そぞろに歩いている貴族がいた。持ってこいの獲物だと勇んで走りかかり、着物を剥ぎ取ろうとしたが、なんとなく恐ろしく足がすくむ。そこで、しばらく後をつけたが、全く気にする風もなく笛を吹いている。何度か打ちかかろうとするが、うまくいかない。しかし引き下がるわけにはゆかぬと気を取り直し、刀を抜いて走りかかると、初めて振り返り"何者じゃ"と問われた。すると不思議なことに、夜道で相手は一人だから恐ろしくないはずなのに、死ぬほどの恐怖を感じて、ぺたりと座り込んでしまった。そして"追剥の袴垂"と思わず答えてしまうと、鬼神に魂を盗られたように、言われるままに男に付いていった。すると大きな家に入り、諭された後、綿の厚く入った着物をくれた。後でその人は武名高く、後世、頼光四天王の一人にあげられる藤原保昌だとわかった」という話で、世間にもてはやされ、江戸時代には武者絵の画題にまでなりました。

この絵馬も人々によく知られた話を、斎藤秋圃がいきいきと描きました。笛を吹きながらゆっくり歩む保昌、襲いかかろうとして恐怖を感じて立ちすくむ袴垂の姿が描かれています。画面に風雅な趣を添える足元の萩や薄、桔梗や露草は、事件が起こった10月という季節を表しているのでしょうか。

さて斎藤秋圃は江戸時代後期の文化・文政期頃から幕末にかけて活躍した絵師です。絵は円山応挙らに学び、大阪で活躍した後、秋月藩の御用絵師を20数年勤め、その後、縁あって太宰府に移り、亡くなるまでの30年を過ごしました。このページで何度か取り上げたことがある吉嗣梅仙や萱島鶴栖は彼の門下です。

この絵は文化12年(1815)の奉納ですので、まだ秋月藩の絵師だったころです。そして家伝によれば、斎藤家は袴垂の一方の主人公、藤原保昌の次男与五郎を先祖に持つというので、これを画題にし、奉納したのでしょうか。

長い歳月で、絵具がだいぶ落ちているのが惜しまれますが、袴垂のウヌッとした眼の表情など、当時はさぞやと想像させます。

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課:〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 (242)

石塔

宝篋印塔板碑（衣掛石）

総高187cm 幅74cm 厚さ38cm
室町時代（14世紀～15世紀前半） 国分区所在

菅公の衣掛石と言われる石で、現在も小さな祠の中に納められています。昔、菅公（菅原道真）が大宰府に流されて来た時、ここで衣服を改め、その着ていた衣を掛けた石と伝えられているものです。

江戸時代には既に衣掛けの石として、「国分の南西の人家の後に在る（略）上に堂を建て村民地蔵といふ」（『筑前国続風土記拾遺』）などと記され、村人には知られていました。

そんな謂れの石ですが、石そのものは、室町時代前半期に彫られたと思われる宝篋印塔と、塔身の中そして相輪の両側に種字（梵字）を刻んだ板碑です。塔身の種字は金剛界大日如来を表わす𑖀𑖽、相輪右側は観音菩薩の𑖮𑖿、左側ははっきり見えないのですが不動明王𑖨か地蔵菩薩𑖭のようにも思われます。

人々に大事にされて来たのでしょう保存状態も良く、端正な姿を残しています。

▲宝篋印塔板碑（衣掛石）

道標石

総高67cm 正面幅17cm 側面幅12cm
江戸時代 国分寺境内所在

風化が激しい石塔ですが、それでも次のような文字が残っていました。

「北四丁／国分寺道」「五 施主／筑洲□」「乙亥四月」

そして定印を結ぶ阿弥陀如来坐像の浮彫りがかろうじてわかります。

これらからこの石柱は国分寺への参詣道を示す道標の一つで、国分寺から4丁（約436m）の所に、江戸時代の宝暦5年（1755）乙亥の4月に建てられたものと推定されます。

そして国分寺再興の時期を考える際、大変興味深い石柱です。同寺の縁起には元文年間（1736～41）に再興されたとありますが、この道標はそれを補強する可能性を秘めていると言えましょう。

▲道標石

これらの調査は真野修さんに協力していただきました。

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198 太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府の文化財 243

太宰府天満宮絵馬堂の絵馬

太宰府天満宮所蔵

草摺引の場　一面　江戸時代

この絵馬の題材は歌舞伎の人気演目の一つ、曾我物から取っています。

曾我物とは所領争いで父を殺された曾我十郎祐成と五郎時致の兄弟が、敵の源頼朝の重臣工藤祐経を富士の裾野の巻狩の折、討ち取ったという事件が『曾我物語』として人々に伝えられ、特に江戸時代にはそれを題材にした人形浄瑠璃や歌舞伎の作品が数多く作られます。それら一連の作品を曾我物といいました。江戸時代中期ごろからはお正月に曾我物を上演することが恒例になったそうです。有名な演目では『曾我対面』『矢の根』そして踊りの『草摺引』があり、あの『助六（助六由縁江戸桜）』も曾我五郎が助六と名乗って云々という曾我物の一つです。

▲草摺引の場　縦228.5cm　横279.4cm　樟材

この絵馬はその曾我物の一つで、酒宴の席で口論となった兄十郎を救いに五郎が鎧を小脇に駆け出そうとするのを、大力の小林朝比奈が、その鎧の草摺（スカートのような鎧の裾）を引いて止めるという話を舞踊化した「草摺引」を描いたものです。ただこれは板地に絵を描いたのではなく、クスノキの材で形を作って彩色し、貼り付けた立体感のある絵馬です。現在は残念ながら色がはげてしまっていますが、五郎と朝比奈による引っ張り合いの緊迫した雰囲気は伝わって来ます。

裏面に書かれた内容から、この絵馬は文政10年（1827）2月に地板を作り替えたこと、その費用は福岡城下の浜ノ町の人々が出したこと、3人の大工さんが関ったことがわかります。ちなみに浜ノ町は、現在の福岡市舞鶴三丁目あたりです。

▲馬　図　縦113cm　横143cm

余談ですが浜ノ町公園、浜ノ町病院という名はこれに由来していたのですね。

江戸時代、大衆に人気があったことを彷彿させる曾我物絵馬です。

馬　図　一面　江戸時代

残念ながら、すっかり色が落ちていますが、面繋や胸繋など馬を飾る馬具の一部に残る色から、初めは美しい絵馬だったと想像されます。

この絵馬は文化15年（1818）の初夏に福岡城下材木町の米屋、徳次さんが寄進したものです。材木町は現在の天神三丁目の北半分あたりです。

なお、文化15年は4月22日に改元され、文政元年になります。初夏の奉納だと、実際は改元された後に掲げられたのかもしれませんが、年号を刻んだときは、まだ文化15年だったということでしょう。時代の境目に出来た絵馬です。

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 244

太宰府天満宮絵馬堂の絵馬

太宰府天満宮所蔵

騎馬武人図 一面

江戸時代　桑原鳳井筆

▲騎馬武人図　縦221.3cm　横180.2cm　樟材

筑前四大画家の一人、桑原鳳井が描いたものです。筑前四大画家とは文化文政期から幕末にかけて活躍した筑前の町絵師四人・斎藤秋圃・桑原鳳井・石丸春牛・村田東圃を言います。

桑原鳳井は寛政5年（1793）に嘉麻郡大隈（現在の嘉穂町）に生まれ、今の東区二股瀬の茶店で育ち、絵は福岡藩の御用絵師衣笠守由に学びました。その後、長州の赤間関の小田海僊にも師事しています。人物画を得意とし、中国の人物に題材をとったものも多いそうです。

この絵馬も服装から中国の武人のように見えます。馬の下にいるのは鬼みたいです。中国の故事か、三国志あたりに題材を取っているのではないかと調べましたが、良くわかりません。佐々木滋寛「桑原鳳井について」（『都久志』第三号・昭和6年）には「風神と雷神とが騎士に追はれる図や『三国志』の蜀の張飛と趙雲が世嗣劉禅を呉から奪い還しにゆく図」が絵馬堂に架っているとありますが、強いて言えば馬の下の鬼が風神でしょうか。すると雷神が居ないので、対になるもう一枚の絵馬があったのでしょうか。それとも本に載っている絵馬とこれとは全く別のものでしょうか。

騎士を乗せて空を駆ける馬の躍動感あふれるこの絵馬は鳳井30歳の文政5年（1822）の作です。

奉納したのは福岡湊町の廿五夜連の人たちで、11名の名前が墨書されています。湊町は現在の福岡市中央区港二丁目・荒戸一丁目あたりです。廿五夜連とは、天神様の縁日が廿五日なので、そういう名を付けた天神講の一つではないでしょうか。

神職の一つ、検校坊を取り次ぎに奉納しています。

山姥図 一面

江戸時代　桑原鳳井筆

これも桑原鳳井が描いた絵馬です。

題材は、謡曲「山姥」や江戸時代それらをもとに近松門左衛門が作った義太夫浄瑠璃「嫗山姥」に取っています。

マサカリかついだ金太郎（歌舞伎では怪童丸）は、切腹した坂田時行の血を浴びた遊女八重桐が山姥となって産んだ子で、幼い時から力持ち。ある時、源頼光の前で熊と相撲を取ったが、片足をつかんでクルクルと回して投げ飛ばし、「ああくたびれた乳が飲みたい母様」と母が膝にもたれけるという場面があるそうで、浮世絵師喜多川歌麿も母に抱かれた金太郎など金太郎シリーズ40数作を描きました。

この絵馬も母の山姥に抱きついている金太郎と、前に横たわっているのははっきりは見えませんが、謡曲に登場する山姥の曲舞を舞う都の遊女でしょうか。

「騎馬武人図」から5年後の文政10年の奉納です。

▲山姥図　縦179.4cm　横192.8cm　杉材

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 245

軍団印（重要文化財）

遠賀団印　縦4・2cm　横4・1cm　総高5・2cm
御笠団印　縦4・3cm　横4・3cm　総高5・2cm
青銅製　奈良時代　東京国立博物館蔵

奈良時代の軍隊の印鑑です。どちらも太宰府市内で見つかりました。しかもこの二つ以外、今のところ日本では軍隊の印鑑は見つかっていないという大変貴重なものです。

遠賀も御笠もその名前から筑前国の軍隊ということがわかります。

このころ軍隊は軍団といいましたが、軍団一団は兵士1000人で構成され、各国に数団ずつ置かれたようです。それがまもなく一律1000人から、1000人・900人～600人・500人以下という三つの規模が認められるように改制されました。

兵士になるのは21～60歳までの成年男子の農民（正丁）で、同一家族の中に正丁が3人～4人いれば、その中から一人を兵士に出すという方式だったと思われます。

こうして集められた兵士は1年間京で警備につく衛士や3年間九州で防人をする要員以外、自分の住居に近い軍団に所属しました。そして軍団は中を10班に分け、10日ずつ交替で出勤し、訓練と守備などにあたる決まりだったようです。

さて、この軍団印を使った遠賀団や御笠団があった筑前国の軍団に話を戻しますと、平安時代の弘仁4年（813）には筑前国には四つの軍団があり、1団1000人の定員だったことが確認できます。そしてこの二つの印が発見されたことにより、四つの軍団の内、2団は遠賀団と御笠団と言ったことがわかりました。

ただ軍団がどこに駐屯していたか、詳しいことはわかっていません。遠賀団印が見つかったのは現在の水城小学校内で、明治32年に旧御笠北高等小学校の校舎を新築中の時でしたが、どうもそこには軍団に関わる施設はなかったようですし、御笠団印も国分の桑畑（現在は坂本三丁目）から出土しましたが、その辺りも現在までのところ、それらしき施設の跡は見つかっていないのです。

軍団も一つの官僚組織でしたから、文書がたくさん作られ、公印が必要だったでしょう。しかしなぜ、こんな所で見つかったのでしょうか。諸国軍団は国司の指揮下にあったので、軍団の事務は国府で行われたのかもしれません。水城小学校の付近は、筑前国府の推定地の一つですから、国府に事務局が置かれたとしたら、出土する可能性はあるかもしれません。でも、これはあくまでも想像にすぎません。前述したように、通常、軍団はどこに駐屯していたのか、その事務局はどこに置かれたのか、わからないのですから。

廃止と復置を繰り返した諸国の軍団をしり目に存続した大宰府管内の軍団も平安時代の初めの天長3年（826）には廃止されてしまいます。そしてこれらの軍団印もお役ご免になって廃棄されたのでしょうか。

印面の上下を表わす「丄」字形を鋳出した撥形のつまみもなかなか凛々しい二つの印がしゃべれないのが残念です。

▲遠賀団印

▲御笠団印

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 (246)

太宰府天満宮のイチイガシ

10月16日、待望の九州国立博物館が開館しました。その国立博物館の周辺には多くの文化財が残っています。今回は、その国立博物館の北の入口にあたる太宰府天満宮にあるイチイガシについて紹介します。

太宰府天満宮の樹木のうちクスノキとヒロハチシャノキについては天然記念物に指定されていて有名ですが、それらのクスノキ群に混じってイチイガシの巨樹があることは意外に知られていません。

イチイガシとはブナ科コナラ属の一種で、関東以西の本州太平洋沿岸、四国、九州にかけての温暖な地域に生育している常緑樹です。その実（どんぐり）は縄文時代から食料として採集されていて、遺跡の発掘現場でも穴に貯蔵した状態で見つかることがよくあります。

太宰府天満宮の社叢には数本のイチイガシが生育し、その中に大きなイチイガシを2本見ることができます。

1本は社殿の東側に位置する中島神社の裏手にあり、整然と並んだ末社の中の天穂日命社の前にあります（写真①）。やや西側に傾いた状態で立っており、幹の表面はマメヅタなどツル性植物に覆われています。高さは約20m、幹周約5・4mを測りますが、幹の南側半分が焼失欠損し、炭化しています。欠損せずにきれいに残っていれば福岡県内最大級の大きさを誇っていたものと考えられます。

もう1本はそのさらに上方の森の中の丘陵斜面にあり、高さ約20m、幹周3・3mで、高さ約5mの所から二股になっています（写真②）。幹の表面は部分的に樹皮が剥がれ落ち、イチイガシ特有の景観を示しています。

2本とも天然記念物には指定されていませんが、太宰府市内でも屈指の大きさで、本市の誇る巨樹のひとつです。

境内にはこのほかにもスダジイやカエデなど様々な種類の樹木が繁茂し、クスノキとともに緑豊かな太宰府天満宮の景観を形成しています。

▲写真①

▲写真②

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198 太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府の文化財 247

原山記念碑

高さ約170㎝、幅90㎝、厚さ36㎝
明治38年　三条一丁目所在

太宰府天満宮周辺には、そぞろ歩きにはおあつらえのあまり知られていない歴史的なスポットが数多く残されています。

天満宮の西側、四王寺山すその連歌屋から三条一帯には、中世に権勢を誇った「原山」という天台宗の寺院がありました。記録には「原山無量寺」「原山醍醐寺」などの名前が見られ、菅原道真の葬儀を行った伝承があります。また、鎌倉時代には浄土宗の発展に寄与した僧聖達、その弟子で踊念仏で時宗をおこした一遍上人がこの寺院で学び、室町時代には都落ちした足利尊氏が九州で再起した際の拠点となるなど、中世の日本の歴史に登場する人々との係わりが深い寺院でもあります。

▲原山記念碑（平成10年撮影）

広大な山内には仏を祀った堂と「原八坊」と呼ばれる8つの僧の組織がそれぞれに居宅を構えており、それらが一体となって一つの寺院となっていた様子が坊の末裔宅に残された「原山古図」に見られます。また、近年の発掘調査により礎石建物や道路、石垣のあとが発見され、寺内の様子が徐々にわかるようになってきました。

寺は戦国時代末期の戦乱で荒廃し、江戸時代には畑などになっていたようで、八坊の末裔がそれぞれの土地を管理していたようです。しかし、明治時代に入り神仏分離政策のため八坊の人々は還俗を余儀なくされ、土地や屋敷を手放す坊もあり、次第に寺の存在が忘れ去られようとしていました。そのような中、ちょうど今から100年前にもとの中堂があった場所に「原山記念碑」が建てられました。

記念碑には、「原山八坊というこの寺は8つの坊（僧侶の集団）から成る天台宗の寺院で、菅原道真の葬儀をつかさどった経緯があり、戦国時代の岩屋城の合戦（天正14年・1586年）によって兵火に焼かれ、江戸時代には天満宮に奉仕する集団として編成され、明治3年（1870）に政府によって廃された寺である。この事跡が後世に消滅するのを恐れて旧八坊の人々が集まって、明治38年（1905）にこの碑を建てた」と書かれています。

碑は一昨年の水害で倒壊したままになっていますが、地元の歴史を顕彰しようとした明治時代の人々の熱い思いがしのばれます。

▲原山記念碑の表面の拓本

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課:〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 248

越州窯系青磁獅子

高さ6.5cm、幅3.8cm、長さ5.5cm
晩唐（9世紀） 通古賀二丁目出土

▲獅子の右半身

かつて正月に獅子舞はつきものでした。今回ご紹介するのは平成元年に旧国道3号線通古賀交差点近くの発掘調査（大宰府条坊跡第87次調査）で発見された獅子の像です。

中国唐時代の焼き物で浙江省にあった越州窯系といわれる陶磁器です。平安時代前半の土器とともに出土しました。素地は灰色で、褐色の釉がかかっています。口元から左半身が欠けています。胴体に目・耳・鼻・牙・足が貼り付けられ、たてがみや目の輪郭はヘラで表現されています。

獅子は世界的に古来より絶大な権力の象徴として、また、その力により聖なるものをまもる守護獣として多くの図像に取り入れられているのですが、この獅子は正面を向きおすわりの姿勢で、耳をねかせ、顔を突き出しているようすはユーモラスで愛らしくもあります。足元まわりの欠け方を見ますと、この獅子はどうやら台座に鎮座していたと考えられます。うつわの一部に添えられたのか、現在見る狛犬のように対になっていたのかなどは不明です。

守護獣としての獅子は仏教とともに日本列島に入ってきたようです。インドで仏像の前に一対の獅子が置かれたことを起源に中国を経て日本列島に伝来しますが、それと共に仏を守護する動物で獅子をかたどった仏像が入ってきます。これが現在神社で眼にする狛犬の起源のようです。その後、日本で狛犬と獅子で一対を形成するようになり「獅子・狛犬」と呼ばれていたものが近世に総称して「狛犬」と呼ばれるようになりました。

◀獅子の顔の部分

では狛犬と獅子の見分けはどうするのでしょうか。平安時代の史料には「頂に白木の角形あり」とあり、どうやら頭のてっぺんに角が一本あるものが狛犬のようです。そうやって見てみると、角があるものとないものが対になっているものを見かけます。竈門神社の木造狛犬は口を閉じた吽形に角の跡があります。

かつて観世音寺講堂で仏を守護していた狛犬は現在宝蔵に安置されていますが、こちらはどちらも角がなく狛犬というより獅子といえます。

梵鐘

昨年子どもが成人式を迎えた。だがまだ学生である。親としては心から祝福してやりたいが、懐さびしい初春の風だ。

そう、学費に加え国民年金の負担も新たに加わった。勿論、子どもは収入が無い、当然猶予申請はできるが、納入義務者には親も含まれる。我家では大蔵大臣の主張を容れ払うことにした。

景気も幾分改善してきているとはいえ、緩やかなデフレ傾向にまだ歯止めがかからない。給与は右肩下がりのまま新年を迎えたが、国では、消費税、医療費の負担増や年金の統合なども論議されている。

いずれも将来的に国民に負担を強いる内容であるだけに、早く経済を緩やかなインフレに誘導し、給与のアップで、新たな負担が賄えるような政策を国には取ってもらいたいものである。（司）

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198 太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府の文化財 (249)

銅製鷽（県指定文化財）

総高（含台座）180㎝
江戸時代　太宰府天満宮蔵

太宰府天満宮に参拝する道順に、鳥居を潜り太鼓橋を渡り、手洗舎で手を洗って本殿に入りますが、その手洗舎の横に麒麟像と並んで「うそ」の鳥の銅像があるのを皆さんはご存知でしょうか。

円柱の上に、ペチャンコの頭と丸いふっくらした体をした可愛らしい鳥がとまっています。これは嘉永5年（1852）に奉納されたもので、中世から続く博多の鋳物師山鹿家の山鹿包秋、包信、包春によって作られました。

昭和37年に県の有形文化財に指定されています。

その円柱の塔身には、正面に上から「奉納銅麒麟」とあり、胴回りには資金を出資した施主である博多町人250人を超える人々の名前が連記されています。

「うそ」の鳥は、1月7日に「鬼すべ」に先立って催される鷽替え神事からきています。これは1年間についた嘘を天神様にあやかって誠の心になるようにと、木鷽を取り替えるお祭りです。

人々はそれぞれ木鷽を持ち、「替えましょ替えましょ」と言いながら木鷽を取り替えます。神職の1人が天神様に代わって金鷽を持って平服で中に入り、取り替えていくのですが、提灯の光の中で行われるので、見分けがつかないようです。合図のあとの点灯で金鷽か否かが分かり、これをいただくとその年は福運に恵まれると言い伝えられています。

京都の北野天満宮ではこの鷽替え神事が2月25日に行われますが、旧暦の2月25日は道真公の御命日でもあります。

▲銅製鷽

▲木鷽

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 250

五条の板碑（文明18年銘）

高さ106cm以上　幅74cm　厚さ約19cm
室町時代　五条二丁目所在

九州国立博物館付近から流れる藍染川は五条交差点の南の五条小橋をすぎて御笠川と合流します。五条小橋は江戸時代の宰府村の南境で、橋の脇には、村境や辻に設けられることの多い庚申塔が建てられていました。

下の写真中央の巨石は天明元年（1781）に立てられた庚申塔です。その両脇に梵字を刻む石碑がありますが、向って左の石碑（板碑）は銘文が刻まれ、室町時代に作られたことが近年わかりました。

▲五条の板碑（現況）

▲五条の板碑（拓本）

中央の大きな円の中に梵字「ウン」が刻まれ、その下に19文字（推定）が刻まれています。1行目には願主（あるいは施主）の名前とみられる文字が並び、2行目には板碑が造られた年号－文明18年（1486）が、3行目には干支が「午」年であることと、月日が記されています。

梵字「ウン」は、「庚申待」の本尊である青面金剛を示します。庚申塔の江戸時代以前の事例は全国的にもたいへん少なく、この板碑が庚申塔として造られたとは今のところ断定できません。梵字が青面金剛も示すため、江戸時代以降に庚申塔として合祀されたと考える方が良いと思われます。

▲左が文明18年銘の板碑、中央は庚申塔

さて、梵字「ウン」は、強力な力をもつ仏を示し、青面金剛以外に愛染明王などにも使われます。愛染明王は、空海が中国からもたらした密教の仏で、恋愛・縁結び・家庭円満などをつかさどる仏として、また「愛染＝藍染」と解釈し、染物・織物職人の守護神として、中世鎌倉時代以降に広く信仰されるようになりました。

この梵字を愛染明王と考えると、不思議と関連する事柄がこの場所にはあります。

ここを流れる藍染川は、染川・愛染川などとも呼ばれ、歌枕として平安時代に書かれた『伊勢物語』『拾遺和歌集』などに登場します。また中務頼澄と梅壺との恋愛悲話が伝わるなど、恋愛に関する川として古来から有名でした。このほか、中世にはこの通り筋に「宰府六座」として商工業者が集まっており、その中に「紺屋」つまり染物業を行う人々もいました。

こうした状況をみると、板碑の製作が中世の愛染明王信仰に何かしら関連していたことも考えられます。

板碑が造られた当時は戦国時代の混乱の中にありました。板碑が造られたいきさつについてははっきりしませんが、強力な力を持つとされる仏にすがる思いが背景にあったことは想像されます。

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601